

研究論文

恵庭型プレイセンターにおける母親の参加意識

大 滝 まり子

Mothers' attitude towards participation in "the Eniwa-type playcentre"

OHTAKI Mariko

Abstract: Playcentre is an early childhood service for families, started in New Zealand 60 years ago. Playcentre's philosophy is "parents and children learning and growing together." Parents are required to take part in the activities and management of the playcentre. In Japan, playcentre started in 2000 in Tokyo, and "the Eniwa-type Playcentre" was established by the local government in 2009.

In this paper, a group of participants in the Eniwa-type Playcentre (PC) is compared with a non-participant group (NP). 35% of the PC mothers felt it was hard for them to understand each other in the previous types of service, and only 9% of NP did so. 36% of PC, in contrast with 65% of NP, said they had enjoyed the previous services. Asked about their Playcentre experience, 74% of the PC mothers expected their children to play with peers, 61% felt comfortable, 77% felt they were warmly welcomed, and 50% felt they understood each other in the Playcentre. 55% of the PC mothers wanted to continue to be involved in the Playcentre activities after their children finished the Playcentre program. These results suggest that the Eniwa-type Playcentre is one good system that not only provides parents with support in child-rearing, but also with opportunities for both parents, especially mothers, to take a more active part in activities of the community.

I 研究の目的

プレイセンターは、ニュージーランド発祥の幼児教育制度で、親子がともに育ちあう場として親の活動から各地に広がり、約60年の歴史がある。プレイセンターの基本方針は以下の3つであり、これらは日本のプレイセンターにも受け継がれている。

- ①「子どもの遊びを尊重する」 遊ぶことは学ぶことであり、子どもの自由な活動を大切に、子どもの遊びを禁止したり、作ったものを壊したりしないこと。
- ②「親の学習」 親は協力して育児をしながら、教育理念やトラブルへの対処などについて学び

あう。

- ③「親による協働運営」 親が力を出し合って運営する。プレイセンターではスーパーバイザーというリーダー役がいて、まとめ役として、またプレイセンターというシステムの継続性のために重要な役割を担っている。また、親たちが互いを愛称で呼びあうこともプレイセンターの約束の一つである。

ニュージーランドでは、最近幼稚園の普及によって幼児教育施設の1割強へと減少してきたことであるが、日本においては平成12年(2000年)ころから、「子育て支援」活動の一つとして、親の運動により首都圏を中心に徐々に普及してきた。

「恵庭型プレイセンター」のプロジェクトは、平成20年度の内閣府「地方の元気再生事業」に採択され、初の自治体設置のプレイセンターとして、恵庭市に開設された。少子化社会の中で広がっている育児不安を解消するためには、親子の育ちあいの場であるプレイセンターが有効である¹⁾との判断に基づいている。上記の基本ルールを守ったうえで、各プレイセンターには独自の活動や運営の仕方が認められているため、恵庭型には民間設置のプレイセンターとは異なる特徴が生まれる余地がある。

筆者は、恵庭型プレイセンターの準備段階である「プレ・プレイセンター」の時期から本企画にかかわる機会を得て、20年度の本格的実施と同時に受託研究を担当した。日本の他のプレイセンターは親たちの強い願いをもとにした草の根的運動で設置されているが、「恵庭型」にあっては自治体が提供した場であるという違いがある。そこで本研究では、親の協働運営が求められる子育て支援システムである「恵庭型プレイセンター」において、設置後間もない時期の参加者がプレイセンターをどのように受け止め、どのようにかかわろうとしているかを明らかにしたいと考える。

II 調査方法

プレイセンターに参加している母親を「参加群」とし、これに参加していない「一般群」にも質問紙による調査を実施して、両群の回答を比較した。調査時期はプレイセンターが本格的にスタートした10月から約5ヶ月後の平成20年2月下旬から3月上旬である。

質問紙の配布と回収状況：「参加群」配布99、回収71（回収率71.71%）。「一般群」配布157、回収123（回収率78.3%）。一般群の対象は、3歳児健診・ひろば事業・保健事業（フッ素塗布など）・一般家庭（就園前）から、ほぼ同数ずつランダムに対象者を選択し依頼した。

III 結果と考察

1 自分と家族について

(1) 参加している親の年齢 20代：参加群15.49%、一般群21.95%。30代：参加群73.24%、一般群68.29%。40代：参加群11.27%、一般群7.32%。

(2) 現在の就労状況 両群ともに無職（専業主婦）が最多で、参加群では87.32%、一般群では84.55%であった。フルタイム勤務は参加群2.82%、一般群4.88%であった。

(3) 過去の就労経験 参加群は「結婚を機に退職した人」が42.16%、一般群では34.58%であった。「結婚後も仕事を継続して妊娠・出産を機に退職した人」は参加群では45.78%、一般群では50.38%であった。「結婚前から現在も仕事を継続している」ケースも一般群のほうが多かった。この結果から、参加群の方が、退職時期が早く、仕事を継続する割合も低いことが分かる。

(4) 子どもの年齢と数 参加群の家庭では、「子ども数」は平均1.73人で、「1歳以下」は0.25人、「小学生以上」が0.31人。不参加群では「子ども数」は1.53人、「1歳以下」は0.62人、「小学生以上」は0.23人。参加群の方が、不参加群より1歳児以下が少なく、小学生以上が多い。参加群の親の方の年齢構成が一般群よりもやや上であるのは、子どもの年齢が上であることと関連している。また、参加群の方が家庭にいる期間と子育ての期間が長いといえる。

(5) 子育てを手伝ってくれる人（複数回答）

「夫」やその他の身内と答えた割合は参加群が多い。特に「夫の親」を選んだのは参加群の方が一般群より約10ポイント多い。

表1 子育てを手伝ってくれる人（複数回答）

手伝ってくれる人	参加群 人(対回答者%) N=71	一般群 人(対回答者%) N=123
夫	56 (78.87)	93 (75.61)
自分の親	34 (47.89)	55 (44.72)
夫の親	24 (33.80)	29 (23.58)
自分のきょうだい	12 (16.90)	15 (12.20)
夫のきょうだい	3 (4.23)	2 (1.63)
子どもの誕生前からの友人・知人	2 (2.82)	5 (4.07)
子育て中の仲間	8 (11.27)	12 (9.76)
保育所・幼稚園	8 (11.27)	13 (10.57)
近所の人	4 (5.63)	8 (6.50)
いない	7 (9.86)	10 (8.13)
その他	3 (4.23)	10 (8.13)
無回答	0 (0.00)	1 (0.81)

2 プレイセンターへの参加について

参加群に、プレイセンターの参加について質問した。一般群と比較している場合は、その旨を(比較)として項目名の右に記した。

(1) 現在プレイセンターに来ている子どもの人数 「1人」が73.24%、「2人」が21.13%、「3人」が2.82%（親子2組）であった。

(2) 初めて参加した時期 プレイセンターが本格的にスタートした「20年10月」が44.44%、「20年11月」25%、3番目は「プレ・プレイセンター事業」から16.67%で、比較的早い時期からの参加が86%である。その後は冬を迎え、乳幼児を連れて外出することを控えたのか、新参加は停滞気味であった。

(3) 参加頻度 毎月の参加状況は、「一定していない」が33.80%いるが、「ほぼ毎回」と「2、3回」を合わせると59.16%である。しかし回答率を考慮すると、「1度だけ来てやめてしまった」人は数字に表れないうえ、「1回程度」の人が登録者の中に相当程度いることが推測される。

(4) 参加のきっかけ 「友人・知人からの誘い・紹介」が61.1%、「広告やチラシを見て」が30.56%である。子育て支援の場を選ぶにあたって、「口コミ」の力と、恵庭市が新しい子育て支

援の場として大々的に宣伝したことの効果が大きかったようである。

(5) 他の子育て支援の利用経験（比較） 対になった5組の質問の回答を見ると、他の子育て支援において、「親同士の関係」、「自分の居場所」について、参加群は一般群ほど満足していない。

表2 他の子育て支援の利用経験

他の子育て支援の場を利用した経験	参加群 人(対回答者%) N=71	一般群 人(対回答者%) N=123
・利用したことがある	58 (81.69)	92 (74.50)
自分の居場所が	見つかった 5 (7.04) なかった 8 (11.27)	25 (20.33) 7 (5.69)
子どもの遊びは	自由だった 18 (26.76) 制限があった 8 (11.27)	43 (34.96) 2 (1.63)
子どもへの配慮が	あった 16 (22.54) 不足していた 1 (1.41)	32 (26.02) 1 (0.81)
親同士の関係を	作れた 9 (12.68) 作りにくかった 25 (35.21)	35 (28.46) 11 (8.91)
楽しいと	感じていた 26 (36.62) 感じなかった 9 (12.68)	65 (52.85) 4 (3.25)
・利用したことはない	9 (12.68)	23 (18.70)
その他	3 (4.32)	2 (1.63)
無回答	1 (1.41)	5 (4.27)

(6) プレイセンターを利用した感想

表3 プレイセンターの感想

プレイセンターの感想	参加群 人(対回答者%) N=71
自分の居場所があると	感じる 44 (61.97) 感じない 12 (16.90)
子どもの遊びが自由	である 64 (90.14) でない 0 (0)
親子双方が受け入れられていると	感じる 55 (77.46) 感じない 4 (5.63)
親同士の意思疎通が	できる 36 (50.70) 不十分 24 (33.80)
親と保育者(市職員)の間が	丁度よい 54 (76.06) 距離がある 5 (7.04)
他の子育て支援と変わらない	4 (5.63)
その他	4 (5.63)
無回答	1 (1.41)

「自分の居場所がある」と感じたのが6割以上、「親子双方が受け入れられている」は8割近い。「親同士の意思疎通ができる」も開設後間もない時期ながら5割に達している。「子どもの遊び」も9割が自由と感じており、プレイセンターの基本方針が徹底されていることがうかがわれる。これらの結果については、プレイセンターという新しい子育て支援システムを理解して運営にあたった職員(保育者)のかかわり方が、大きく影響していると考えられる。²⁾

(7) プレイセンターに期待すること (複数回答)

表4 プレイセンターに期待すること (複数回答)

プレイセンターに期待すること	参加群 人 (対回答者 %) N=71
子どもが他の子どもと遊ぶ機会を作りたい	53 (74.65)
子どもと外出することを楽しみたい	43 (60.56)
子育ての様々な知識や工夫を学びたい	35 (49.30)
子どもとの上手な遊び方を知りたい	33 (46.48)
自分自身が友だちを作りたい	28 (39.44)
子育てで不安を持つ親と支えあいたい	14 (19.72)
企画などに参加したい	14 (19.72)
学習会に参加したい	14 (19.72)
少しでも子どもと離れる時間を作りたい	10 (14.08)
子育ての悩みを聞いて欲しい	10 (14.08)
自分の子育てがこのままでよいのか知りたい	7 (9.86)
その他	3 (4.32)

「子どもが他の子どもと遊ぶ機会を作りたい」が1番多いが、子育て支援の選択には親自身の居心地の良さが大きく影響することは、表2、表3に表れている。また、「子育ての様々な知識や工夫」についての関心も高く、「企画に参加したい」、「学習会に参加したい」が約2割いることにも、子育てを通して学び、行動する意欲が表れている。

(8) 子どもを見る目の変化

表5 プレイセンター参加後の子どもを見る目の変化

子どもを見る目や子育て観について今までは変わりましたか		参加群 人 (対回答者%) N=71
子どもの目線に立てるように	なった	16 (22.54)
	なりたい	24 (33.80)
子育てを楽しめるように	なった	31 (43.66)
	なりたい	11 (15.49)
おおらかな気持ちで子育てしようと思うように	なった	34 (47.89)
	なりたい	14 (19.72)
他の子どもたちもみないとしく可愛く思えるように	なった	26 (36.62)
	なりたい	13 (18.31)
特に変化は	しない	14 (19.72)
	望まない	4 (5.63)
その他		2 (2.82)
無回答		2 (2.82)

各回答から、子育てについて心にゆとりが出てきたことが表れている。「他の子どもたちも皆いとしく可愛く思えるようになった」も、ゆとりの表れを示している。

(9) 今後どのような立場で参加したいか (複数回答)

「楽しみながら自分のできることをしたい」が8割以上おり、2～3割が他の親や子どもとのかわりや、活動主体としての参加の意欲を持って

いる。「親の協働」が少しずつ受け入れられてきていると思われる。

表6 今後の参加の仕方について

どのような立場で、今後参加したいか	参加群 人 (対回答者 %) N=71
楽しみながら自分のできることをしたい	59 (83.10)
他の親とかかわっていききたい	21 (29.58)
他の子とかかわっていききたい	20 (28.17)
他の親と一緒に、企画や何かの担当をできるようにしたい	13 (18.31)
プレイセンターの楽しさを伝えて参加者を広げていきたい	11 (15.49)
まだよくわからない	9 (12.68)
無回答	1 (1.41)

(10) 自分の子どもが成長した後のプレイセンターとのかかわり (複数回答)

表7 わが子の成長後のプレイセンターとのかかわり

自分の子どもが成長した後のプレイセンターとのかかわり (複数回答可)	参加群 人 (対回答者 %) N=71
かかわりたい	38 (53.52)
まだ分からないが、なんらかの形で	26 (36.62)
学習会・研修会など	8 (11.27)
子どもの面倒を見てあげられる「頼れる卒業生」として	5 (7.04)
資料作りや、記などにかかわりたい	4 (5.63)
その他	3 (4.23)
無回答	5 (7.04)
かかわりたいと思わない	28 (39.43)
無回答	3 (4.23)

「自分の子供の成長後にもプレイセンターとかかわりたい」38人(55.07%)のうち、「学習会・研修会」、「頼れる卒業生」、「資料作り・記録」など少数ながら明確なイメージを持っている親の存在は、プレイセンターが単に子育て支援の場としてだけでなく、親の活動や学びの場として機能していることを意味する。ニュージーランドでは、プレイセンターは「子育て経験と地域社会をつなぐ場」³⁾と理解されていることと考え合わせて、興味深い結果である。

(11) 子ども観、子育て観について (比較)

① 子どもを見る目

表8 わが子の見方

子どもをどうみているか	参加群 人 (対回答者%) N=71	一般群 人 (対回答者%) N=123
かわいいと思う	62 (87.32)	116 (91.31)
発達に不安な面がある	5 (7.04)	10 (8.13)
いろいろな面が順調に発達していると思う	42 (59.15)	88 (71.54)
見ているだけで楽しい	33 (46.48)	65 (52.85)

「かわいいと思う」が、両群とも大多数であるが、「いろいろな面が順調に発達していると思う」は、参加群は59.15%で一般群より12ポイント以上低い。しかし、「発達に不安がある」は、両群の差が小さい。これは参加群が、子どもの何が不安ということではなく、漠然と「順調な発達」に確信が持てないという傾向が強いということなのかもしれない。

② 子育て中の自分

表9 育児方針

育児方針	参加群 人(対回答者%) N=71	一般群 人(対回答者%) N=123
小さいうちは甘やかしてもいいと思う	5 (7.04)	21 (17.07)
子どもは厳しく育てるべきだと思う	6 (8.45)	7 (5.69)
しつけのためには体罰も必要だと思う	5 (7.04)	11 (8.94)
早期教育に関心がある	7 (9.86)	12 (9.76)

両群とも「いらいら」を子どもに向けていることは注意すべき点である。

③ 育児方針

表10 子育て中の自分

子育て中の自分	参加群 人(対回答者%) N=71	一般群 人(対回答者%) N=123
子どもにどう接すればいいのか不安になる	11 (15.49)	15 (12.20)
子育て中は世間から取り残されているような気がする	9 (12.68)	12 (9.76)
子育てによって自分も成長した	40 (56.34)	73 (59.35)
いらいらして子どもに当たることがある	29 (40.85)	55 (44.72)
子どもに縛られているようでつらい	3 (4.23)	10 (8.13)
子どもと遊ぶのは楽しい	37 (52.11)	65 (52.85)
子どもが泣いたり体調が悪いと、不安でたまらない	9 (12.68)	23 (18.70)

「小さいうちは甘やかしてもいいと思う」は一般群が17.07%で、参加群より10ポイント以上多い。しかし差は小さいものの、「厳しく育てるべきだ」は3ポイント近く参加群の方が多く、一方「体罰容認」は2ポイント近く一般群が多い。

(12) 自由記述 自由記述の中から、親の参加に関するものを抜粋した。「要求」「不満」については、プレイセンターの基本方針を守りながら、すでに改善されている点もある。

[好評価、期待]

- ・プレイセンターのよさをもっと分かってもらいたい。遊びの広場と思っている人が多いと思うし、学習会など行って、理解してもらえるといいと思う。私ももっと分かってほしい。期待している。
- ・プレイセンターに参加して、気分が楽になった。(同趣旨 他に1件)
- ・子どもが大きくなるにつれ、二人でお出かけするのに慣れてきたときに、プレイセンターが出来たのですごくありがたい。最近は離れて遊べるようになってきたし、子どもの中にも慣れてきてうれしい。感謝！先生たちみなさん子どもとのかかわり方や遊び方が上手で、まねていきたいことがいっぱいあります。息子も先生が大好き。
- ・子どもと家において、ストレスや不安を抱えている人や、どこに行けば友達ができるのか分からないお母さんが1人でも減るように、プレイセンターが気軽に遊びに行き楽しめる場所であってほしい。
- ・プレイセンターが子育て中の私たちのパワー発揮の場、きっかけになるのではないかと楽しみにしています。子育ては父親にとっても成長のビッグチャンスですね。
- ・いろんな遊び物があつたりする。決まったことをしなくていい。
- ・プレイセンターに参加して、引越してきて知り合いが出来ていくのが楽しみになった。
- ・途中参加のせいか、私自身人見知りのためもあり、ちょっと入りにくい空気も感じる。遊びに関してはとても素晴らしい。積極的に参加していきたい。
- ・市職員が本当に子どもが好きで、一所懸命で親子に熱心に接してくれる。
- ・プレイセンターが、子どもが楽しく遊べ、のびのびと成長できる場であることを望んでいる。

[改善要求]

- ・子育て支援センターやサークルとの違いを明確

に伝えるべき。(同趣旨 他に1件)

- ・ 親同士が月に1, 2回でも交流する場があってもよい。今後の運営は親の意識にかかっている。
- ・ 親の学習会のとき、赤ちゃんのいるママも参加しやすいようになるとよい。
- ・ 父親も気楽に参加できる企画があるとよい。地域で子育てしていると言う気持ちになれると、自分もまわりのお母さんたちも楽しく子育てしていけるのではないか。うちの子もまわりの子も一緒に育っていく地域というのが理想。

[不満、戸惑い]

- ・ 当番表が送られてきて、ちょっと行きづらくなった。
- ・ 行くたび、行くたび、マイクで意見を求められるのが苦痛だ!! 自分の意見をまとめてうまく言える人はいいけど、あがって何も浮かばないのに、マイクが来るので、あの時間がいやで、行く気がうせる。やめて欲しい。もっと気軽に行けるといいのに。
- ・ ただ遊ぶのではなく、子どもと一緒に遊ぶことを知らなかった。
- ・ 当番があるとは知らなかった。
- ・ いろいろ話し合いがあったりするとところと知らなかった。
- ・ 勉強会がある、毎日利用できない、利用日が固定しているなど知らなかった。

IV まとめ

本研究は、「恵庭型プレイセンター」が本格的にスタートしてからわずか5カ月後の調査である。そのため「プレイセンター」の特徴が十分に周知されていなかったためか、自由記述には親たちの戸惑いが少なからず見られた。子どもの遊びへの満足度はかなり高いといえるが、親の学習と協働運営という2点は、従来の子育て支援と異なっているため、そこがプレイセンターの長所であるにもかかわらず、すぐには受け入れにくい点ともなっている。

しかし、従来の子育て支援事業が親をサービスの受け手としてのみとらえ、その主体的活動にほとんど期待していなかったのに対して、「恵庭型プレイセンター」は親の協働運営を自治体の子育て支援に取り入れた画期的な試みであり、それが受け入れられつつあることを本研究は明らかにした。子育て支援に限らず、保育にかかわる者は、プレイセンターを受け入れた親たちのニーズを改めて理解する必要があるのではないだろうか。

子育て支援のあり方については、「これからの子育て支援は、『すべての子ども』の生活の場、育ちの場として家庭と連携しながら提供される必要がある、また、『子育て終了者』対『子育て中の者』という対立図式はサービスや施策の展開に障害になる」⁴⁾という指摘もある。プレイセンターのような新しい子育て支援システムの存在意義を示唆しているといつてよい。

最後に、わが子がプレイセンターを終了しても、積極的にかかわっている親が2人いることを報告しておく。

付記

本研究は、平成20年度の内閣府「地方の元気再生事業」に採用された「恵庭型プレイセンター社会実験プロジェクト」の委託研究費を受けて実施した研究（主任研究員大滝まり子）のデータの一部を再分析したものである。

引用文献

- 1) 中島興世 子育ては仲間とともに 恵庭市 2008
- 2) 古郡曜子 恵庭市子ども家庭課 「恵庭型プレイセンター社会実験プロジェクト」共同研究報告書 2 恵庭市職員のプレイセンター6ヶ月 2009
- 3) Gwen Somerset We Begin Playcentre— Families Together New Zealand Playcentre Federation 1990

- 4) 柏女霊峰・山本真実 新時代の保育サービス
 ス フレーベル館 2000

参考文献

- 池本美香 プレイセンターへの挑戦 子育てに自信を 恵庭市子ども家庭課 2008
- 恵庭市子育てガイドブック えにわっこ 恵庭市 2009
- 大滝まり子、古郡曜子 恵庭市子ども家庭課「恵庭型プレイセンター社会実験プロジェクト」共同研究報告書1 参加者及び不参加者のアンケート 2009
- 大日向雅美・荘巖舜哉編 子育ての環境学 実践子育て学講座 大修館書店 2005
- 汐見俊幸ほか編 子育て支援の潮流と課題 子育て支援シリーズ ぎょうせい 2008
- 日本プレイセンター協会 プレイセンターへようこそ 2001
- プレイセンター 家族が一緒に成長する 恵庭市 2009
- プレイセンターがおもしろい！ 恵庭市広報 2009.1
- 松川由紀子 ニュージーランドの子育てに学ぶ 小学館 2004
- 吉倉薫 子育てと教育を考える首長の会 恵庭市子ども家庭課 2009
- レッジョとテ・ファリキ 現代と保育69号 ひとなる書房2007

(2010年1月15日受稿)

